

河原町埋藏文化財調査報告書 第16集

鳥取県

河原町内遺跡発掘調査報告書

2004.3

河原町教育委員会

序

この報告書は、一般県道河原インター線整備事業に伴い、必要となった予定ルート内の試掘調査として、平成15年度に国庫補助金を受けて実施した埋蔵文化財調査の記録であります。

中国横断自動車道・姫路鳥取線の関連事業として進められている一般県道河原インター線（3・6・1号高福西御門線）は、姫鳥線河原インターチェンジへのアクセス道であり、国道29号と国道53号を結び、高速道路網を補完する幹線道路として鳥取県が整備しています。

当初、平成18年度開通予定で整備が進んでいた姫鳥線ですが、小泉内閣の構造改革の影響により、高速道路の建設主体である日本道路公団の民営化方針が示され、高速道路の新規建設については、民営化会社が有料道路の料金収入を最大限活用する資金調達方式での整備区間と、国と都道府県の負担で整備する新直轄方式による整備区間に分けて、10～15年で供用開始を目指す方針が示され、姫鳥線の開通が遅れることが懸念されました。

その後、鳥取県、岡山県及び兵庫県三県の連携もあって、姫鳥線の鳥取一智頭、大原一佐用の2区間が、新直轄方式の対象区間に指定され、姫鳥線開通へ向けて一歩前進したところです。新直轄方式で整備されれば、高速道路は無料開放されることとなります。

姫鳥線が何年後に開通するのかは現在のところ分かりませんが、開通時点で一般県道河原インター線が供用開始されていることが必要であります。

河原町は古事記所載の八上姫のふるさとであり、町内には延喜式神名帳に記された式内社が5社現存するなど、太古から開けてきた私たちの誇りうる郷土です。「豊かな心で自然と歴史が調和した活力ある町」をキャッチフレーズに、我が町の歴史や有形、無形の文化財を大切に後世へ伝えるため町民への啓発を進めながら、近年増えてきた開発事業との調整を図りつつ、埋蔵文化財調査を実施しています。

河原町としても、この道路開発を地域発展の重要課題ととらえ、調整のために実施した埋蔵文化財発掘調査でしたが、結果としては新たに3基の古墳と5箇所の出土地を発見するなど、本町の歴史を解き明かしていくための貴重な資料を得ることができたと考えています。

この調査に際しましては、用地関係者、作業従事者等関係各位の格別なご理解とご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。また、鳥取県教育委員会事務局文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの適切なご指導、ご助言をいただきながら調査を無事に終了し、本報告書が発刊できましたことに深甚なる感謝を申し上げます。

本報告書が、郷土理解と今後の調査研究の一助になれば幸いです。

2004年3月

河原町教育委員会

教育長 田 渕 暉 夫

例 言

1. 本報告書は、一般県道河原インター線整備事業に作り、平成15年度に国庫補助、県補助を受けて実施した試掘調査の記録である。
2. 本報告書は調査員中道が執筆、編集した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は調査員中道が作成した。
3. 本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔高である。
4. 本報告書における記号は、トレンチをT、遺物をPoとする。
5. この調査による遺物に記載したネームは、三谷出土地は「MT」、郷原出土地は「GB」とした。
6. 発掘調査で得られた記録類、出土遺物等は河原町教育委員会に保管する。
7. 調査関係者は次のとおりである。

調査団長 田 湖 暉 夫 (河原町教育委員会教育長)

調査員 中 道 秀 俊

事務局 小 泉 悦 則 (河原町教育委員会教育課長)

中 道 秀 俊 (河原町教育委員会課長補佐)

調査協力 [△]三谷部落

[△]郷原部落

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

鳥取県埋蔵文化財センター

発掘作業員 池長よね子 川嶋 彰 下田茂登子

中道 育子 八田 星代 前田 市郎 森田 輝子

目 次

序

例 言

日 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	5
第1節 調査の概要	5
第2節 トレンチ調査状況	6
1 三谷所在遺跡周辺	6
2 郷原古墳群周辺	6
3 郷原所在遺跡周辺	6
第4章 まとめ	13

図版

報告書抄録

挿図目次

挿図1 周辺遺跡分布図	3
挿図2 調査区位置図	5
挿図3 三谷所在遺跡・郷原古墳群・郷原所在遺跡周辺トレンチ配置図	9
挿図4 三谷所在遺跡T1-1南壁土層断面図及び平面図	10
挿図5 三谷所在遺跡T1-3北壁土層断面図	10
挿図6 郷原古墳群T8-5東壁土層断面図	10
挿図7 郷原古墳群T8-3東壁土層断面図及び平面図	11
挿図8 郷原所在遺跡T2-3南壁土層断面図	11
挿図9 郷原所在遺跡T4-4西壁土層断面図	11
挿図10 郷原所在遺跡T4-1東壁土層断面図及び平面図	12
挿図11 郷原所在遺跡T7-1東壁土層断面図	12
挿図12 郷原所在遺跡T7-2西壁土層断面図	12
挿図13 出土遺物実測図	14

挿表目次

挿表1 三谷所在遺跡・郷原古墳群・郷原所在遺跡周辺トレンチ一覧表	8
挿表2 出土遺物観察表	14

图版目次

- 图版 1 T 1—1 完掘状况
T 1—2 完掘状况
T 1—3 完掘状况
T 9—1 完掘状况
T 9—2 完掘状况
T 9—3 完掘状况
T 9—4 完掘状况
T 9—4 附近 五輪塔検出状况
- 图版 2 T 8—1 完掘状况
T 8—2 完掘状况
T 8—3 完掘状况
T 8—4 完掘状况
T 8—5 完掘状况
T 2—1 完掘状况
T 2—2 完掘状况
T 2—3 完掘状况
- 图版 3 T 3—1 完掘状况
T 3—2 完掘状况
T 4—1 完掘状况
T 4—2 完掘状况
T 4—3 完掘状况
T 4—4 完掘状况
T 4—5 完掘状况
T 5—1 完掘状况
- 图版 4 T 5—2 完掘状况
T 6—1 完掘状况
T 6—2 完掘状况
T 6—3 完掘状况
T 6—4 完掘状况
T 7—1 完掘状况
T 7—2 完掘状况
T 7—3 完掘状况
- 图版 5 出土遺物(1)
- 图版 6 出土遺物(2)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

一般県道河原インター線は、本町大字高福の国道53号と郡家町大字西御門の国道29号を結ぶ、中国横断自動車道姫路鳥取線河原インターチェンジへのアクセス道路として計画されている幹線道路である。

本町側から着工し、平成19年3月までの1期工事では船岡町大字下町までの区間の完成が見込まれていたが、鳥取県政の重点施策である高速道路周辺整備として平成15年度着工見込みとなったことで、平成15年1月28日(火)、河原インター線予定ルートを踏査してトレンチ位置を確認し、2月7日(金)、河原町役場において鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センター、八頭地方県土整備局、河原町建設課及び河原町教育委員会が協議し、開発スケジュール等を確認した。

その結果、平成15年度工事予定区間の試掘調査を平成14年度中に実施することとし、鳥取中核工業団地(仮称)予定地内と合わせて試掘調査を実施した。平成14年度の試掘調査結果については、一般県道河原インター線の区間内で遺構、遺物とも発見されなかった。

そして、引き続き平成15年度に残りの区間について試掘調査を実施することとし、7月23日(水)から河原インター線に係る試掘調査に着手した。

鳥取県では、一般県道河原インター線について、八頭中央都市計画道路の追加路線「3・6・1号高福西御門線」6.34キロの都市計画案として作成し、平成16年1月9日から23日まで関係町の役場で縦覧した。道路構造は片側1車線、車道部分の幅員6.5メートルで、総事業費は約135億円である。縦覧後、2月上旬に開催された鳥取県都市計画審議会に諮られ、都市計画決定された。

また、同時に河原町内では、近年普及が進んでいる携帯電話の基地局整備も進められた。携帯電話会社の工事引き受け会社から、平成15年1月16日付で片山地区への基地局基礎設備工事に関する協議があり、開発地点について試掘調査は不要としたが、用地確保が難しく、他地点への変更となった。

そして、4月17日付で変更地点への文化財協議があった。新たな候補地は、片山地区の霊石山中腹にある最勝寺旧跡地内であったため、鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事の派遣を依頼し、5月15日(木)に現地確認を行って、開発には試掘調査が必要であることと、旧跡、「源 範頼の墓」、「歴代住職の墓」など、一帯の歴史的景観等を損なわないよう、開発地点の若干の移動を求めた。

その後、電波状態の制約や携帯電話会社の意向により、開発位置そのものの変更が行われ、霊石山の麓への変更に伴う文化財協議が平成15年8月28日付で提出され、現地確認を行い、試掘調査不要と回答した。これにより、工事は適切に行われた。

姫鳥線の関係では、高速道路の新規建設について、民営化会社が有料道路の料金収入を最大限活用する資金調達方式での整備区間と、国と都道府県の負担で整備する新直轄方式による整備区間に分けて10～15年で供用開始を目指す方針が示され、鳥取県、岡山県及び兵庫県三県の連携もあって、姫鳥線の鳥取一智頭(24キロ)、大原一佐用(19キロ)の2区間が新直轄方式の対象区間に指定された。

なお、新直轄方式での道路整備については、工事の引き継ぎに時間がかかることなどを理由に、国土交通省が日本道路公団に工事を委託する方法で整備が図られることになるようである。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

河原町は鳥取県東部のほぼ中央部に位置する。東は八頭郡郡家町、船岡町、西は気高郡鹿野町、東伯郡三朝町、南は八頭郡用瀬町、佐治村、北は鳥取市に隣接している。

中国山地に源を発し、日本海へと注ぐ鳥取県三大河川の一つ、千代川が町中心部を縦断している。古くからの川の町であり、飲み水、魚介類、米づくりなど、人々は千代川を生活のよりどころとしてきた。片山遺跡など町内の遺跡では、土錘の出土が見られ、古くから漁業が行われていたことを示している。また、千代川の水勢は急で水量が少ないため水運には適した川ではないが、高瀬舟や、いかだ流しなどで、古くから水運が行われてきた。

しかし、川がもたらすものは恩恵ばかりではない。八頭郡内のすべての町村から流れ出た川が河原町で一つになる。八頭郡東部を流れる八東川が町北部で千代川に合流しており、集中豪雨時の洪水で苦しめられてきた。1593年(文禄2年)8月の洪水は、千代川の東岸にあった袋河原が西岸に移った(水路がかわった)ほどの大洪水であったという。この洪水は、太閤秀吉が高麗征伐中であったことから「高麗水」といわれている。その後も、幾度となく訪れる洪水と闘いながら人々は暮らしてきたが、昭和9年から昭和32年までにわたる千代川改修工事で、ようやく安眠できるようになった。

陸上交通については、古く鳥取から河原・智頭を通り、志戸坂峠を越え、山陽道を経て大阪・京都に至る上方往来があった。鳥取藩の参勤交代のルートにも利用された重要な街道であり、当時の河原村は旅人の休憩所である茶屋があったことから「上の茶屋」と呼ばれていた。現在は、鳥取市と山陽地方を結ぶ国道53号がほぼ千代川に沿って南北に走っているが、町中心部の交通渋滞緩和のために造られた国道53号河原道路が平成13年に供用開始され、町中心部の交通量が大幅に減った。交通安全を推進する上では良い環境になったといえるが、商店街の売上が減少するなど、マイナス面もあり、今後の町の活性化が急がれている。

また、中国横断自動車道姫路鳥取線のうちの鳥取～佐用間が、数年後の全線開通をめざして整備が進められている。河原インターチェンジ設置など、高速交通体系の整備に伴う地域活性化の拠点整備として計画されている「道の駅」は、平成17年春の完成予定であったが、新直轄方式での姫鳥線整備が決定し、通行料金のかからない自動車専用道路となるため、道の駅へのアクセス道路を含めて河原インターチェンジ周辺整備の計画変更を余儀なくされている。

なお、河原町を含む鳥取県東部10市町村は、現在市町村合併の協議を進めており、平成16年11月1日を合併の期日と定めて、各種事務事業等の調整を進めている。この合併が実現すると、新市は山陰地方を代表する人口20万人の中核市となり、「人が輝き まちがきらめく 快適・環境都市 鳥取」が誕生する。

第2節 歴史的環境

いつのころから河原町域に人が住むようになったのであろうか。縄文・弥生文化に関する河原町内での遺物出土例は少なく、その全容は明らかになっていない。

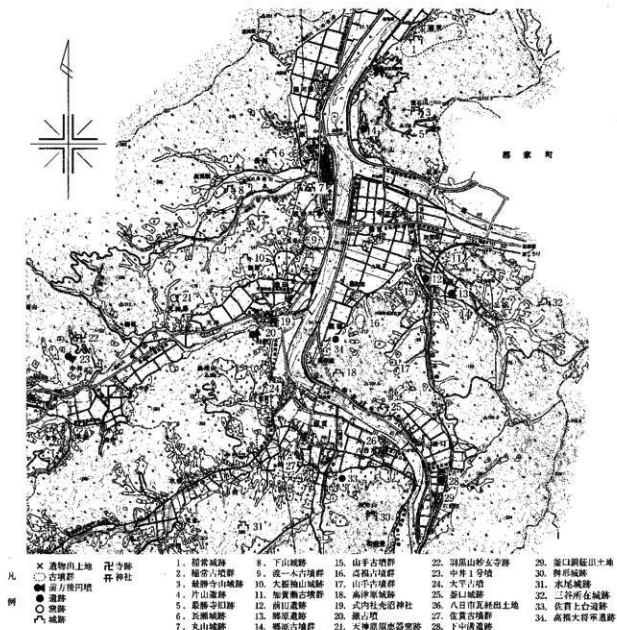
縄文時代に関するものとしては、郷原地区の前田遺跡から三本沈線線で文様を構成する縄文土器が1片と、釜口地区の下中溝遺跡から細片である縄文土器を出土している。また、下中溝遺跡からは、縄文時代後期から弥生時代中期にかけて使用されたと思われる定角式磨製石斧も1点出土している。昭和32年には小畑地区で、よく使われた縄文時代の磨石と石皿が地下約30センチ地点で出土している。

弥生時代に関するものとしては、前田遺跡から弥生土器が5点と、遺物散布地である今在家の上土居遺跡から弥生中期の土器が数片確認されている。弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての資料としては、舞原遺跡、山手森谷上分遺跡で11棟の堅穴住居跡と多数の土器が検出されている。

古墳時代になると、各地に古墳が築造されるようになった。曳山地区、築瀬山のふもとにある嶽古墳は全長50メートルという八頭郡内最大級の前方後円墳で、古事記に記された八上姫もしくは八上姫を中心とした地方豪族の墓ではないかと言えられている。

嶽古墳から曳山川を1キロさか上った天神原地区には須恵器の窯跡があり、3キロさか上った中井地区には千代川流域では最大となる全長55メートルの中井1号墳があり、古代、この流域が因幡地方でもかなりの勢力をもっていたことが伺われる。また、河原町北部にそびえる町のシンボルである霊石山頂の西側ふもと周辺には、88基の円墳で形成された稲常古墳群が眠っている。

奈良・平安時代の遺跡からは、前田遺跡、舞原遺跡、山手森谷上分遺跡等で多数の掘立柱建物跡や、土



師器、須恵器が検出されている。また、下中溝遺跡からは、当時の祭祀に使われたと思われる土馬や獣形土製品が検出されている。

中世になると、前田遺跡で室町時代の12棟の屋敷跡が検出され、長病に臥せる人の快癒を願ったという呪符や舟形木製品などが出土している。

戦国時代、河原町内北東部の主要な山には砦である山城が築かれていた。羽柴秀吉が因幡平定のおり、陣を築いた所と伝えられているのが、現在お城山展望台「河原城」が建っている丸山城である。当時、秀吉軍に協力した弓河内村の長、北村六郎左衛門は1580年（天正8年）、秀吉からその功を認められ、感状を賜っている。

高福古墳群の南側には高津原城があり、高津原城の尾根沿いの南東部には釜口城があり、山陽地方と因幡地方を結ぶ街道筋の見張り台としての役割であろう面影を残している。高津原城は高福古墳群の南南西方向近くにあり、高津原地区の人は高平城といっている。高津原地区に在住する一般研究家の説では、南北朝時代、播磨の赤松氏が智頭郡に攻め入った時、赤松氏が陣取る用瀬の影石城に相対し、現在の八頭郡八東町日下部にあった高平城主である波多野隆平が砦を築いたことから、高平城と呼ぶようになったという。

また、千代川を越えたさらに南側には、枳形城がある。枳形城は八日市と和奈見の中間地にマスの形をしてそびえている枳形山にあって、本丸、二ノ丸、三ノ丸と段々に切りならされており、近郷まれなる構えであった。創立年代は不明だが、福良兵部少輔実滋が1012年（長和元年）ごろ、古城の跡を切り広げ、近郷を領有し居城したという。

枳形城の西、水根地区には水尾城がある。目黒伝之介という四侍が居城し、その近辺はもちろん高草の赤子田の辺をも領有していた。

参考文献「河原町誌」

第3章 調査の概要

第1節 調査の概要

この調査は、一般県道河原インター線の着工予定区間にかかる試掘調査である。トレンチの設定位置については、平成15年1月28日（火）、一般県道河原インター線の予定ルートを鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事とともに踏査した結果に基づき、設定した。

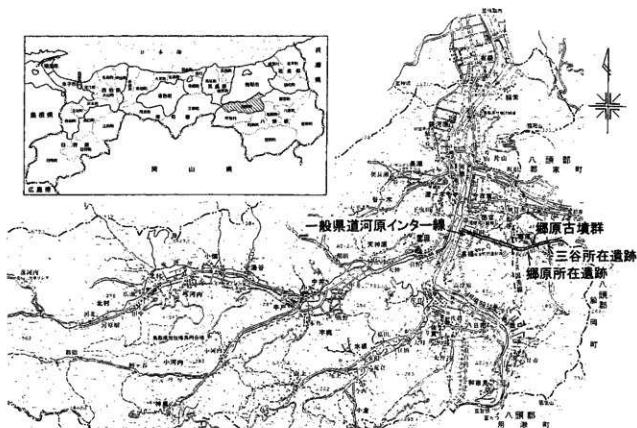
河原町内での予定ルートは、国道53号から河原町総合町民運動場駐車場下をトンネルで通過し、JR因美線を横切り、2つの山を越えて、本町三谷からトンネルで船岡町へ越えるというもので、非常に変化に富んだ地形である。途中には、果樹園を2箇所、出んばを4箇所、畑を2箇所横切る。

また、三谷地区駐車場の手前の山林を通過するが、その山林北隣には、周知の古墳である郷原3号墳が隣接し、山林南隣には墓地があるため、両方にルートをかけないようにするためには必ずルートの制約があった。郷原3号墳の北隣には郷原4号墳、5号墳、6号墳、7号墳が林立している。3号墳から6号墳までが円墳で、7号墳は全長30.5メートルの前方後円墳である。

一般県道河原インター線の予定ルート地内の試掘調査は、平成14年度調査では2本のトレンチを設定し、平成15年度調査では33本のトレンチを設定した。

7月23日（水）から発掘作業にかかったが、遺跡の範囲確定のために、途中で事業費の増額が必要となった。そのため補助金の増額変更申請を行い、十分なトレンチ設定で調査を行った。

調査面積は合計で171.8平方メートル、調査期間は霊石山携帯電話基地局整備工事に係る現地確認の日である平成15年5月15日（木）から平成16年3月19日（金）までである。



挿図2 調査区位置図

第2節 トレンチ調査状況

1 三谷所在遺跡周辺

- T1-1 果樹園北側に設定したトレンチ。地表下約60センチで直径約40センチのビットを1基検出した。また、南壁にもビットと思われる落ち込みが2箇所見られる。遺物は地表下約20センチで土師器片を検出した。
- T1-2 T1-1の南に設定したトレンチ。土師器片、陶器片がわずかに検出されたが、遺構は検出されなかった。
- T1-3 T1-2の東に設定したトレンチ。トレンチ内の確認できる範囲内では1.3メートルの幅にわたって、地表下0.8メートルから1.4メートルへと深くなっていく溝状遺構を検出した。また、T1-1、T1-2と同様に8世紀から9世紀頃の土師器片、須恵器片、陶器片を検出した。
- T9-1 果樹園の南西に隣接し、尾根状になっている部分を少しかけて設定したトレンチ。地表下約60センチで土師器片1点、地表付近で陶器片1点を検出したが、遺構は検出されなかった。
- T9-2 トレンチ内の南側で水路状の遺構を確認したが、遺物は検出されなかった。遺構は古いものかどうかなど、その性格は不明である。
- T9-3 以前は畑であった所だが、耕作放棄により直径1センチの細い竹のやぶとなっている。陶器片が中央部の地表下10センチで1点、土師器片が南側隅下で1点検出されたが、トレンチの状況から運んでこられた土の中にあつたものと考えられる。遺構は検出されなかった。
- T9-4 尾根状地形の雑木間にトレンチを設定したが、トレンチの北側すぐそばの地表付近で五輪塔の転石を発見した。改めて周辺を確認したところ、3～4基分の五輪塔の転石を確認した。
- T9-5 T9-1からT9-5までを設定した場所は、以前は畑であった場所に杉が植林されている。T9-5は遺構、遺物とも検出されなかった。

2 郷原古墳群周辺

- T8-1 郷原3号墳の南に設定したトレンチである。郷原3号墳から7号墳までが連続する地点であり、削平された古墳等の発見も予想されたが、遺構、遺物とも検出されなかった。
- T8-2 尾根の南側にある墓に隣接した地点に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T8-3 周知の郷原3号墳南側の周溝外にトレンチを設定し、郷原3号墳に関わる遺構等が検出されなどうかどうか確認した。その結果、周溝1基を検出し、地表下10センチの周溝内から古墳時代中期(5世紀)の土師器片1点を検出した。
- T8-4 T8-2の西側の地表面で落ち込みが見られる地点に設定したトレンチ。遺溝、遺物とも検出されなかった。
- T8-5 T8-1とT8-2の中間点に設定したトレンチ。北壁に焼土と炭を含む土塊を検出した。遺物は検出されなかった。

3 郷原所在遺跡周辺

- T2-1 休耕田に設定したトレンチ。土師器片、須恵器片を検出したが、遺構は検出されなかった。
- T2-2 T2-1の南側、1段下の休耕田に設定したトレンチである。土師器、須恵器の小片が多数検出された。以前の自然流路と考えられる溝が認められたが、遺構は検出されなかった。

- T2-3 T2-1、T2-2のトレンチを設定した休耕田の北側に、東西に伸びた低い丘の上に墓地があり、墓地東端に設定したトレンチ。周溝が検出され、周溝内埋土から4世紀の波形器台小片1個が検出された。これにより円墳と考えられる古墳は、4世紀のものであることが判明した。また、一般県道河原インター線の予定ルート外となるが、古墳から10メートル東にもう1基、直径10メートル、高さ1メートルの新規発見の古墳が見つかった。
- T3-1 JR因美線近くの耕作放棄されている旧水田に設定したトレンチ。最厚部1.7センチの須恵器片や、土師器片が検出された。遺構は検出されなかった。
- T3-2 T3-1の一段下の旧水田に設定したトレンチ。土師器片、須恵器片が検出された。遺構は検出されなかった。
- T4-1 果樹園の中に設定したトレンチ。ここからは土師器片、須恵器片が検出され、遺構としてピット1基が検出された。また、東壁にはピットと考えられる落ち込みが2箇所認められた。
- T4-2 果樹園の北西側で、山林への傾斜が始まった境目の部分に設定したトレンチ。底部は固い岩盤状になっていた。ここからは須恵器片1個が検出された。
- T4-3 T4-2の南東側そばに設定した短いトレンチ。ここからは弥生上器の甕の口縁片1個が検出された。遺構は検出されなかった。
- T4-4 T4-3で検出された土師器片は上方からの転落ではないかという観点から、上部山林間にトレンチを設定した。底部にある黒土を掘り下げたところ、地山を掘り込んだ形跡があり、掘り込んだ中に地山土が流れ込んでいるため、これを遺構ととらえた。遺物は検出されなかった。
- T4-5 T4-4の西側に設定したトレンチ。T4-4と同じく底部から黒土が現われ、同じような土層である。ピット1基を検出し、遺物は検出されなかった。
- T5-1 畑に設定したトレンチで、土質は良質の真砂土である。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T5-2 果樹園の北側に隣接した屋根の先端に設定したトレンチ。T5-1と同じ土質である。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T6-1 果樹園から登りきった山頂部に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T6-2 果樹園と山頂部の中間点に盛り上がった地形が認められたので、古墳ではないかという観点で上側に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T6-3 盛り上がった地形の下側に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T6-4 T6-1の北側に設定したトレンチ。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T7-1 山頂部の北側に郭状の平地があり、南側の山頂部斜面を含んでトレンチを設定した。底部は岩盤状であるが、トレンチ南側は東西に伸びる溝状の地形となっていた。溝の岩盤上はれきの混じらない層、その上はれきの混じった層となっており、溝状遺構であると考えられる。
- T7-2 T7-1の南側山頂部は平らな地形で最南端が小高くなっていたため、ここを含めてトレンチを設定した。トレンチ北側は直下が平面的な固い岩盤に覆われていたが、南側の小高くなる手前で地層が落ち込んでいたため、その延長を掘り下げたところ、反対側からも落ち込んでおり溝状の遺構であることが判明した。また溝の最底部から、赤色顔料が施された5世紀の土師器高杯の杯部定形を検出した。
- T7-3 T7-2で検出された溝が周溝の可能性もあるため、南西側の屋根続き部分にトレンチを設定したが、T7-2北側と同じく岩盤になっていた。遺構、遺物とも検出されなかった。
- T7-4 T7-3の西側に盛り上がり地形があったためトレンチを設定したが、岩盤となっており、遺構、遺物とも検出されなかった。

区分	トレンチ番号	遺 構	遺 物	規 模
				幅(メートル)×長さ(メートル)
三 谷 所 在 遺 跡	T1-1	ピ ッ ト	土 師 器	4.3×1.5
	T1-2	な し	土 師 器、陶 器	4.0×1.3
	T1-3	溝 状 遺 構	土 師 器、須 恵 器、陶 器	3.6×0.8
	T9-1	な し	土 師 器、陶 器	4.65×1.3
	T9-2	溝 状 遺 構	な し	3.25×1.1
	T9-3	な し	土 師 器、陶 器	4.2×1.05
	T9-4	な し	なし(近くに五輪塔あり)	2.95×0.95
	T9-5	な し	な し	2.95×1.1
郷 原 古 墳 群	T8-1	な し	な し	10.3×1.3
	T8-2	な し	な し	3.8×1.1
	T8-3	周 溝	土 師 器	3.05×2.2
	T8-4	な し	な し	3.5×1.1
	T8-5	土 坑	焼 土、炭	4.7×1.05
郷 原 所 在 遺 跡	T2-1	な し	土 師 器、須 恵 器	5.1×1.3
	T2-2	な し	土 師 器、須 恵 器	4.7×1.4
	T2-3	周 溝	土 師 器	2.8×0.85
	T3-1	な し	土 師 器、須 恵 器	4.5×1.5
	T3-2	な し	土 師 器、須 恵 器	4.2×1.45
	T4-1	ピ ッ ト	土 師 器、須 恵 器	1.6×3.65
	T4-2	な し	須 恵 器	4.7×1.2
	T4-3	な し	土 師 器	1.4×1.1
	T4-4	土 坑	な し	4.6×1.1
	T4-5	ピ ッ ト	な し	1.65×1.3
	T5-1	な し	な し	4.4×1.2
	T5-2	な し	な し	6.0×1.4
	T6-1	な し	な し	4.1×1.2
	T6-2	な し	な し	6.5×1.2
	T6-3	な し	な し	4.4×1.3
	T6-4	な し	な し	2.9×0.9
	T7-1	溝 状 遺 構	な し	3.9×1.3
	T7-2	周 溝	土 師 器	7.3×1.0
T7-3	な し	な し	4.8×1.05	
T7-4	な し	な し	3.15×1.05	

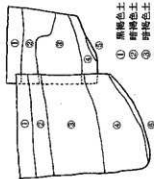
挿表1 三谷所在遺跡・郷原古墳群・郷原所在遺跡周辺トレンチ一覧表



挿図3 三谷所在遺跡・郷原古墳群・郷原所在遺跡周辺トレンチ配置図

H=65.00

H=65.00

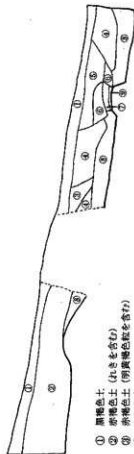


- ① 黒褐色土
- ② 暗褐色土 (やまもろい)
- ③ 暗褐色土 (2センチのれきを含む、しまる)
- ④ 暗褐色土 (砂粒・赤色粒を含む)
- ⑤ 赤色土 (郷原土層じり)
- ⑥ 赤、橙、灰白、赤泥混じり土

挿図5 三谷所在遺跡T1-3北壁土層断面図

H=70.00

H=70.00



- ① 黒褐色土
- ② 赤褐色土 (れきを含む)
- ③ 赤褐色土 (明黄褐色粒を含む)
- ④ 赤褐色土
- ⑤ 暗赤褐色土
- ⑥ 暗赤褐色土 (赤色粒・炭を含む)
- ⑦ 暗赤褐色土 (赤色粒を含む)
- ⑧ にぶい赤褐色土 (地山粒を含む、しまる)
- ⑨ 暗灰色土

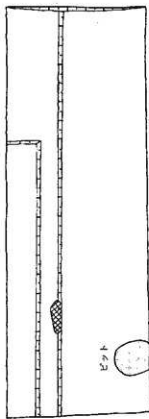
挿図6 郷原古墳群T8-5東壁土層断面図

H=67.00

H=67.00

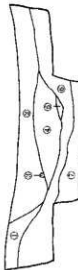


- ① 暗赤褐色土 (れき多い)
- ② 赤褐色土
- ③ 暗赤褐色土
- ④ 褐色土
- ⑤ 赤褐色土
- ⑥ 暗褐色土
- ⑦ 暗赤褐色土 (3~5センチのれき含む)
- ⑧ 暗赤褐色土
- ⑨ 暗赤褐色土
- ⑩ にぶい黄褐色土



挿図4 三谷所在遺跡T1-1南壁土層断面図及び平面図

H=58.00

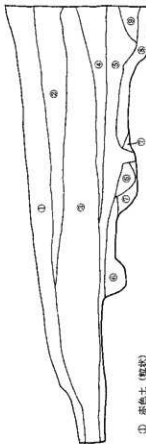


H=58.00

- ① 褐色土
- ② にぶい黄褐色土
- ③ 褐色土
- ④ 褐色土
- ⑤ にぶい黄褐色土 (しまる)
- ⑥ 黄褐色土
- ⑦ 灰黄褐色土 (しまる)

挿図 8 郷原所在遺跡 T2-3 南壁土層断面図

H=70.50

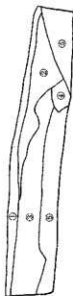


H=70.50

- ① 赤色土 (硬状)
- ② 暗赤褐色土 (硬状)
- ③ 暗赤褐色土
- ④ 赤褐色土
- ⑤ 赤褐色土 (赤褐色を少し含む)
- ⑥ にぶい赤褐色土 (れきを多く含む)
- ⑦ 暗赤褐色土
- ⑧ にぶい赤褐色土 (しまる)
- ⑨ 暗赤褐色土

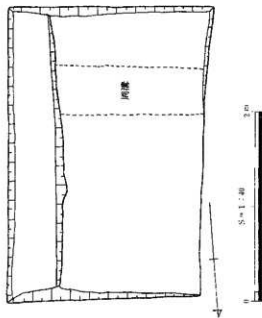
挿図 9 郷原所在遺跡 T4-4 西壁土層断面図

H=75.00

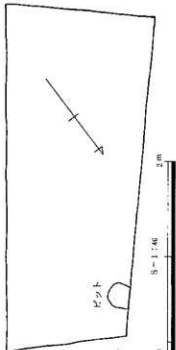


H=75.00

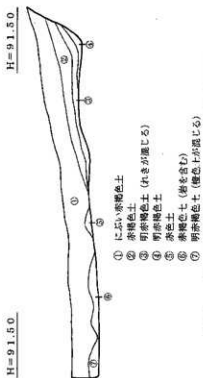
- ① 黒褐色土
- ② 暗赤褐色土
- ③ 赤褐色土 (れきが少なく、ややもろい)
- ④ 赤褐色土
- ⑤ にぶい赤褐色土 (れきを多く含む)



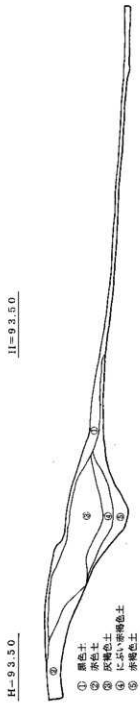
挿図 7 郷原古墳群 T8-3 東壁土層断面図及び平面図



挿図10 郷原所在遺跡 T 4-1 東壁土層断面図及び平面図



挿図11 郷原所在遺跡 T 7-1 東壁土層断面図



挿図12 郷原所在遺跡 T 7-2 西壁土層断面図

第4章 まとめ

この調査は一般県道河原インター線の着工予定区間にかかる試掘調査であったため、調査区域は長距離にわたる範囲となった。しかも、この区域の郷原、三谷地区は千代川西側となって水場に近く、洪水等の影響の少ない、居住しやすい環境にあり、郷原古墳群、三谷古墳群、前山遺跡、郷原遺跡等の隣接地であるため、遺構等の検出が予想された。

調査結果について北側からまとめると、三谷所在遺跡周辺では、三谷地区の果樹園内に8世紀から9世紀頃の集落等の遺構がある可能性が高い。また、果樹園南西側山林で3～4基の五輪塔が見つかったが、いつ頃のものかは不明である。五輪塔群西側の杉林となっている畑跡からは水路跡状の土層面が確認でき、五輪塔群を含め、集落等との関連が考えられる。

郷原古墳群周辺では、周知の古墳である郷原3号墳の北隣に郷原4号墳、5号墳、6号墳、7号墳が林立しており、南隣に地形としては平らではあるが、削平された古墳等の存在が推定された。そして、郷原3号墳周溝のわずかに外側で別の古墳の周溝が検出され、周溝内から古墳時代の上師器が検出されたことで、そこに古墳が存在することが確認された。新たに発見できた古墳は、この1基のみであった。郷原3号墳から7号墳までの古墳群はいずれも盗掘を受けているようであるが、特に7号墳は全長30.5メートルの前方後円墳であり、その規模と墳丘の見事さには圧倒され、往時がしのばれる。

また、新発見の古墳から東側に設定したトレンチ内から土坑と、土坑内から焼土が検出されており、古墳時代あるいは北側にある8世紀から9世紀頃の集落との関連が考えられる。

郷原所在遺跡周辺では、新発見の古墳2基と、3箇所の遺構が見つかった。

古墳2基は、郷原集落から東側に離れた位置にある墓地周辺から発見された。一般県道河原インター線の予定ルート上にある西側の古墳は、墳丘が削平されて個人の墓が造成されている。墓地下に古墳主体部が残っているかどうかは不明であるが、開発に伴い、詳しい調査が必要である。

その南側の休耕田をはさんだ山の頂上には、溝状遺構や、古墳時代中期の溝と高杯が検出された。高杯には赤色顔料が施されていたことから、何らかの祭礼に伴うもの、あるいは墓への供物であると考えられる。高杯が検出された溝は周溝である可能性が高い。

山の西側麓では、山林から土坑とピットそれぞれ1基、果樹園からピット1基が検出されており、集落等の存在が推定される。また、弥生土器と考えられる土師器片が1個出土しており、弥生集落の存在も否定できない。

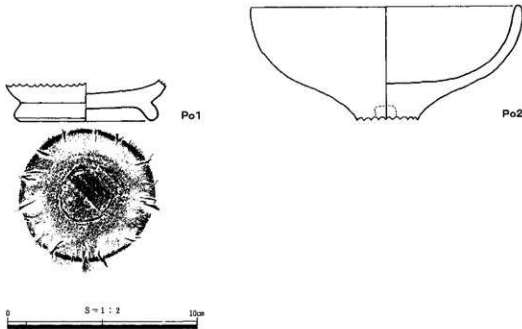
以上のとおり、開発計画に伴う試掘調査であったが、広い範囲にわたって遺構が検出されたことで、開発計画が予定どおり進められる場合は、調査範囲を精査した上で、詳細な本調査を実施することが必要である。

今後、本調査に基づいた現地検証と正確な記録保存により、遺構の存在した当時の様子が明らかになり、本町の歴史が解き明かされることを期待したい。

(a:口径、b:器高、c:底径、*残存値)

遺物番号	遺跡名	トレンチ名	器種	法量cm	形態状の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Po1	郷原所在遺跡	2-2	皿	a — b — c 7.4	底面に焼成後、小判形の線刻印。	内外面回転ナデ。 内面底部中心折頭印痕。	0.1~2mmの長石の砂粒を含む。	良	内外面とも灰色。	
Po2	郷原石室門遺跡	7-2	高坏	a 14.3 b 6.0* c —	口縁部は外傾し、上下に拡張する。	外面：ヨコナデ。 内面：ヘラミガキ。	0.1~2mmの長石、石英の砂粒を含む。	やや不良	外) 橙色で5cm×13cmにわたり焼成時の黒斑がある。 内) におい橙色。	赤色地彩

挿表2 出土遺物観察表



挿図13 出土遺物実測図

圖 版



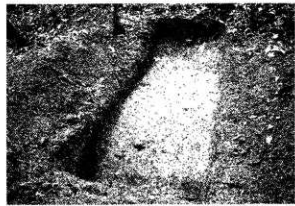
T1-1 完掘状况



T1-2 完掘状况



T1-3 完掘状况



T9-1 完掘状况



T9-2 完掘状况



T9-3 完掘状况



T9-4 完掘状况



T9-4附近 五輪塔検出状况



T 8-1 完掘状况



T 8-2 完掘状况



T 8-3 完掘状况



T 8-4 完掘状况



T 8-5 完掘状况



T 2-1 完掘状况



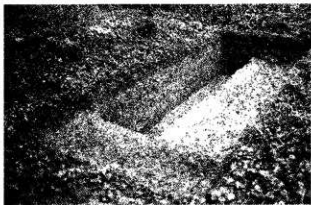
T 2-2 完掘状况



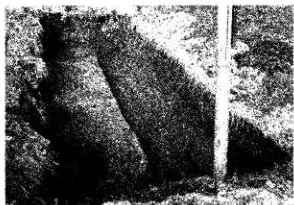
T 2-3 完掘状况



T 3 - 1 完掘状况



T 3 - 2 完掘状况



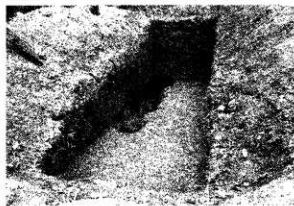
T 4 - 1 完掘状况



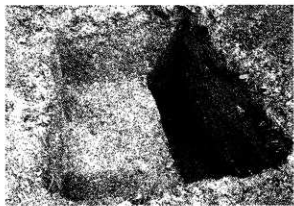
T 4 - 2 完掘状况



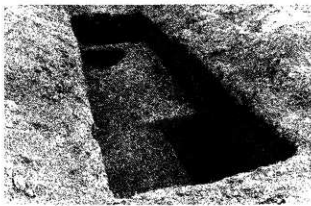
T 4 - 3 完掘状况



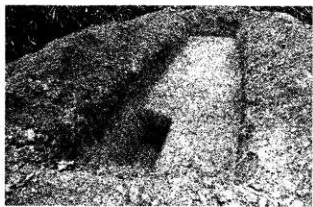
T 4 - 4 完掘状况



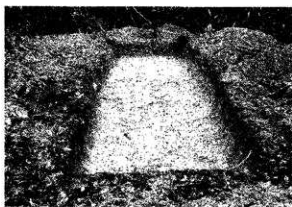
T 4 - 5 完掘状况



T 5 - 1 完掘状况



T 5-2 完掘状况



T 6-1 完掘状况



T 6-2 完掘状况



T 6-3 完掘状况



T 6-4 完掘状况



T 7-1 完掘状况



T 7-2 完掘状况



T 7-3 完掘状况



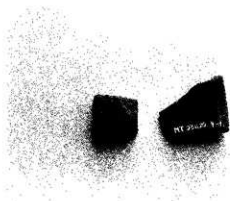
T1-1 出土遺物



T1-2 出土遺物



T1-3 出土遺物



T9-1 出土遺物



T9-3 出土遺物



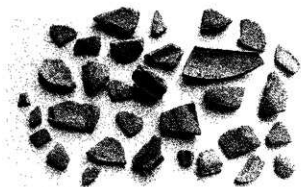
T8-3 出土遺物



T2-1 出土遺物



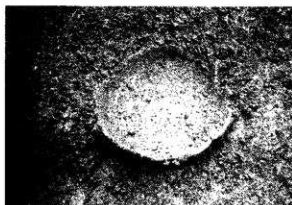
T2-1 出土遺物



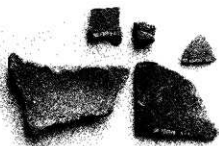
T 2-2 出土遺物



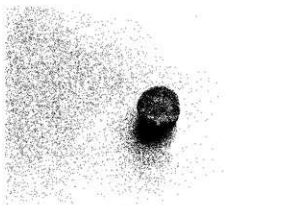
T 2-3 出土遺物



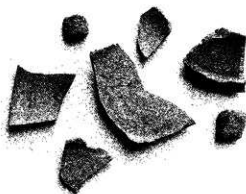
T 7-2 出土遺物及び出土状況



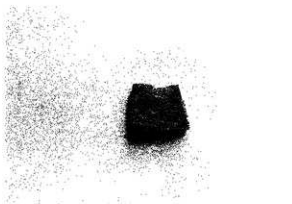
T 3-1 出土遺物



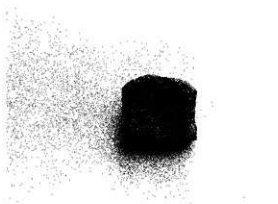
T 3-2 出土遺物



T 4-1 出土遺物



T 4-2 出土遺物



T 4-3 出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	かわはらちょうないいせきはつつちょうさほうこくしょ							
書名	河原町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	一般県道河原インター線整備事業に伴う試掘調査							
巻次								
シリーズ名	河原町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	16集							
編著者名	中道秀俊							
編集機関	河原町教育委員会							
所在地	680-1221 鳥取県河原町大字渡木277番地							
発行年月日	西暦 2004年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三谷国ヶ谷遺跡	鳥取県八頭郡 河原町大字二谷	31323		35度23分20秒	134度13分32秒	2003.7.23 ~2004.3.15	34.6	一般県道河原 インター線 整備事業
郷原古墳群	鳥取県八頭郡 河原町大字二谷	31323		35度23分20秒	134度13分30秒	2003.11.17 ~2004.3.16	33.1	一般県道河原 インター線 整備事業
郷原石堂口遺跡	鳥取県八頭郡 河原町大字郷原	31323		35度23分13秒	134度13分20秒	2003.7.30 ~2004.3.19	20.7	一般県道河原 インター線 整備事業
郷原地才工下平遺跡	鳥取県八頭郡 河原町大字郷原	31323		35度23分12秒	134度13分17秒	2003.7.25 ~2004.3.17	83.4	一般県道河原 インター線 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
三谷国ヶ谷遺跡	集落	奈良	ピット 溝状遺跡	土師器、須恵器、五輪塔			土坑内に焼上あり	
郷原古墳群	古墳	古墳	周溝	土師器				
郷原石堂口遺跡	古墳	古墳	溝	土師器			古墳の可能性あり	
郷原地才工下平遺跡	集落	弥生 古奈	ピット 土坑	土師器、須恵器				

河原町埋蔵文化財調査報告書 第16集

鳥取県八頭郡河原町

河原町内遺跡発掘調査報告書

発行 2004年3月19日

編集 河原町教育委員会

〒680-1221

鳥取県八頭郡河原町大字渡一木277番地

電話 (0858) 76-3122

発行者 河原町教育委員会

印刷 勝美印刷株式会社